

日 時 令和元年9月11日(水) 5時間目 13:40~14:30 (50分)

会 場 上田市立第三中学校格技場

参加人数 124人

(内訳 1学年全生徒120人 教頭・教諭4人 講師1人、事務局1人含まず)

### 【授業…50分】

弱き者の友たれ～小河滋次郎博士～ 講師：関 秀雄 氏(小河滋次郎博士顕彰会副会長)

- ・三中は、山極勝三郎博士のゆかりの中学校として、博士の胸像や博士を研究する生徒に向けたサトウハチローの詩碑がある。因みに博士の胸像は、日本に3つしかない。一つは、上田城跡公園内、一つは、東京大学医学部病理学教室3階ロビー、そして、三中である。これは、誇るべき事実である。
- ・なぜ東大にもあるのかは、東大医学部を経て、東大医学部教授として病理学を教示したことから。このほか東大には、医学部2号館本館の入口に、博士の句「癌出来つ 意気昂然と 二歩三歩」が掲げられ、さらには、病理学者の慣例として、献体をしたことから、遺体が解剖された大理石の解剖台が記念碑として壁面に埋め込まれている。
- ・今回、お話するのは、山極博士の生涯を通じての無二の親友である小河滋次郎法学博士。映画「うさぎ追いし～山極勝三郎物語～」を観ていると思うが、この中で全編にわたり登場していたのが、小河博士である。

#### 【宮下学年主任から講師紹介】

- ・小河滋次郎博士顕彰会の副会長
- ・小河博士の後輩(早大教育学部卒)で、長年高校教諭を務め、現役の最後は、上田高校で国語科教諭。現在は、野沢北校に非常勤で勤務。



- ・小河博士も、山極博士同様、当初医師を目指していた。このため、医学書の読破のために、東京外国語学校のドイツ語学科(中途退学)と慶應義塾医学所に学んだが、医学所の廃止により、当時開校したばかりの東京専門学校(現 早稲田大学)とダブルスクールで、東大別科法学科で学んでいた。
- ・ちなみに、小河博士は、東京専門学校創設者の大隈重信侯を慕っており、開校の報が届くやいなや応募した(その後、第一回主席修了生となり、その後、大隈侯像序幕式に、校友代表として大隈侯の前で祝辞を述べた。)
- ・東大別科で出会ったのが、生涯の師となる穂積陳重(のぶしげ)法学部長である。この後、穂積教授の力添えにより、内務省(のちに司法省となる。)に奉職することとなり、監獄行政のキャリアが始まった。



【山極博士と親友小河博士の認知度を聞く】

- ・山極博士は、約半数の生徒が知っていたが、小河博士は皆無。
- ・うさぎ追いし～山極勝三郎物語～も残念ながら全員が観ていない。

- ・山極博士の研究は、昭和40年以降、当時の黒坂周平校長が先頭に立って進めてきた。
- ・その後、現上田商工会議所柳澤会頭が、郷土史研究班長として博士の研究を始め、これがNHKで放映されたことを契機に有名になった。このために、校内には、山極博士のコーナーもあり、胸像、サトウハチローの詩碑もある。
- ・博士の生家は、三中の通学区の鎌原で、養子先の山極医院も馬場町にあった。
- ・山極博士顕彰会は、事務局は上田医師会、坂城町の寿製薬のCMでも流れているので、知名度は高い。さらに、映画『うさぎ追いし～山極勝三郎物語～』があった。
- ・一方、小河博士は、活躍のベースは、東京、大阪であり地元にはほとんど戻らなかった。平成27年に顕彰会は出来たが、ほとんど地元での知名度はない。今回を契機に3中での知名度を高める契機にしてほしい。



【関講師のプレゼンテーションに真剣に聞く生徒】

- ・前半生の内務省時代の話聞く生徒。
- ・熱心にメモを取っている。

【小河博士の生家馬場町からの通学生は？の質問】

- ・残念ながら一人もいない。
- ・学区の中心市街地周辺からの通学生徒がいない。



- ・小河博士の前半生は、内務省で、監獄行政官として勤務した。
- ・常に「弱き者の友たれ」を信念に、社会的弱者への視線を持ち、これに抗する考えには、決してぶれることのない言動を貫いた。
- ・この時代に、昂然と「死刑廃止論」を唱えたのも小河博士である。
- ・しかし、これらの事が、監獄行政官として、何度も日本代表として万国監獄会議に出席したキャリアとは裏腹に、内務省から機構改革で司法省に異動した小河博士の居場所をなくしていった。
- ・おそらく、信念を曲げ、静かにいけば高級官僚としての椅子が約束されていただろうが、それはしなかった。
- ・当時の監獄行政は、犯罪者の懲罰に重きを置き、更生という視点がなかった。
- ・博士の考え方の根底は、感化教育。犯罪を犯した青少年をいかして更生して社会に戻らせるかであった。
- ・小河博士は、特に若年層の犯罪は、貧困から生じているとして、この解決のために社会事業（今で言う地域福祉）の仕組みづくりと家庭教育の充実を唱えていた。



- ・司法省を退職した博士は、監獄局当時の上司大久保利武（利通の三男）が府知事であった大阪に招かれ、社会事業の顧問となった。
- ・大久保知事の辞職に伴い、辞職するつもりであった小河博士は、後任の同じく監獄局当時の上司である林市蔵知事の懇願により、引き続き任にあたることとなった。
- ・当時勃発した「米騒動」は、想像を絶する社会不安を引き起こしていた。
- ・このため、生活困窮者のための対策が急務であった。
- ・小河博士が、制度設計したのは、「方面委員制度」であり、現在の「民生・児童委員制度」の前身。小学校区に配置する方面委員が、生活困窮者の支援にあたる仕組みは、まったく同じ。
- ・方面委員は、その後10年で日本全国に広がる。



【学年代表から御礼のことば】

- ・分かりやすく説明して頂き感謝します。
- ・山極博士同様に、小河博士も研究したい。



まとめ

- ・山極博士と同様、小河滋次郎博士も、この三中の学区に生まれた。
- ・二人の博士に共通していること・・・決して信念を曲げず、最後までやり遂げる姿勢。皆もこのDNAを受け継いでいる。これから困難に幾度もぶつかるが、常に前進してほしい。
- ・この講座を契機に、山極博士の生涯の親友である小河滋次郎博士の研究を深めてほしい。

(了)